

愛之理は發用をさせりと、此の説非也。朱子曰、愛之理者、是乃指其體性而言、此の説の證とすべし。愛は用なれども、愛の理は内にふくめるを以ていへば、あらはれたる用に非ず。朱子又曰、仁は溫和慈愛の道理、○中略、朱子の此の二説にて、仁の字義大むねそなはれり。

〔駿臺雜話〕仁は心のいのち

ある時、例の人々とぶらひ来て、講習しけるが、仁義の説に及べり、中にひとりいひけるは、人は天地の心を得て心とす、天地は萬物を生ずるをもて心とする故に、それを得て心とすれば、人は人を愛するをもて、心の徳とする事勿論なり、よりて仁は心之徳、愛之理といへり、心の徳とあれば、仁義禮智諸ともに仁にもる、事なき程に、仁は四者を包て、義も、禮智も、仁によりて立なり、是は翁鳩巣の講説にてかねて承りし事にて侍る、但仁は人を愛する心にあらずや、それを衆善の長とする事、たれも知たるやうに候へども、大かたは人はたゞ慈悲を第一とするをもて、仁を衆善の長とするとばかり意得侍る、それは慈悲の重き事をいはゞ、玄かいふてもやみなし、今仁を心の徳とするは、さやうの一通りの淺き事にてはあるまじく候、いかなければ慈悲の心ひとつが、心の徳となりて、義も禮も智も仁なれば、うせほろぶるにやあらんと工夫すべき事にて侍る、されど此ところを今少し承たくこそ候へ、翁聞て、只今申さるゝ所すこしもちがひなく聞へ侍る、されば日ごろ申たる外に、改て申べき事もなく候へども、猶くはしく申候はゞ、心の仁あるは人の元氣あるがごとし、人の元氣は脉にあらはれ、心の元氣は愛にあらはる、脉のかよひ絶れば、人死するごとく、愛の理ほろぶれば、心死する程に、仁は心のいのちとも申べし、夫心は活物なるにより、人に情あり、物の哀をゑりて、常にいきたる物ぞかし、よりて父母を見ては自然に親愛し、親愛せざるに忍びず、君長をみては、自然に尊敬し、尊敬せざるに忍びず、齒德を見ては自然に遜讓し、遜讓せざるに忍びず、義を聞いては必感する事をゑり、不義を聞いては必恥ることをゑる、もし情なく